

おわりに

まず、ここまで一橋祭研究「鉄道と『統合』—メディアの役割を考える—」をお読みいただいたことに、感謝の意を表します。ありがとうございます。

さて、昨年度までの一橋祭研究をご存知の方からすると、本年度の研究は、ボリュームも減りその内容も大きく違った方向に向いていることにお気づきいただけたかと思います。近年を振り返ってみますと、鉄道会社の経営や直通運転の効果を数値化して考察するなど、数字を扱う商学・経済学的なアプローチを採る研究を多く行ってきました。そういった状況をふまえ、数年来行われていなかった人文社会学的なアプローチを採る研究を行いたいと考えたのが始まりでした。研究担当者は元々メディアに興味関心を持っていましたが、そういった興味と鉄道研究会での一橋祭研究を結び付けることができないかと考えた結果、この「鉄道と『統合』—メディアの役割を考える—」というテーマにたどり着き、研究案として練っていきました。

ボリュームの減少に関しては、来年度以降大きく部員数が減少すると思われるため、これまでの人海戦術的な研究手法から脱却しようと考え、事例研究の数を例年より絞ったために発生したことです。やや物足りないと思われるかもしれませんが、来年度以降に向けた試みということでご容赦いただければと思います。

鉄道と国民や近代化に関しては、これまで多くの研究がなされ、多くの言説が生まれてきました。鉄道が作られることによって、それまでつながることのなかった地域がつながり、経済的な効果だけでなく人の交流を促進し、民衆に共同体の一員としての意識を持たせることになり国民や国家を作り出したことは本論の中でも触れたとおりです。鉄道が国民・国家を作る。隅々まで鉄道が敷設された現代においては、なんとも想像することが難しいことかもしれません。昨年の研究で見たとおり、

地方の路線においては廃線の流れが押し寄せており、「鉄道の終わり」には常に目が向いていると思いますが、そういった中「鉄道の始まり」に思いを寄せ、そこからわれわれ自身のことを考えてみることもまた一興。本研究がそのきっかけになるのであれば、それは喜ばしい限りの話であります。

最後になりますが、研究担当がすべての点において至らず、原稿を執筆していただいたり資料収集に協力していただいたりした一橋鉄研の皆様には、多くのご迷惑をおかけしました。「今年度の研究は大丈夫だろうか？」と思われたかがおそらく多くいらっしまったかと思いますが、そういった中でも最後まで協力していただけたからこそこのような形で研究誌を完成させることができました。いくら感謝しても足りないとは思いますが、改めてここに深い感謝の念を示します。ありがとうございました。

一橋大学鉄道研究会2018年度研究主担当

一橋大学鉄道研究会2018年度研究副担当

一橋大学鉄道研究会 2018 年度研究副担当